

中国語受身文の成立条件—日本語との対照研究を通して—

楊彩虹

京都外国語大学（院）

要旨

中国語の受身文は日本語の他動詞受身文より文法的な制限が強い。中国語受身文において、結果性の強い動詞の場合、動詞に“了”などのアスペクトマーカ―を付けて、受身文を成立させる。結果性が明確でない場合は、動詞に結果補語、様態補語を付けて受身文を成立させる。また、量的限定などの手段によってイベントを具体化することで受身文を成立させる。結果と具体化はリアリティにつながるものと考えられる。一方、持続を表す動詞、イベントを表す動詞、生産動詞、状態的心理動詞は受身文が成立しにくい。イベントを表す動詞の場合は、外的働きかけを持たないため、受身文が成立しにくい。リアリティ（結果性が含まれる）と外的働きかけは中国語受身文の成立条件であると考えられる。また、中国語の受身文はすでに存在しているものが外的な働きかけを受けて生じた結果をリアルに描写することであると言えよう。

キーワード：中国語、受身文、結果、リアリティ、外的働きかけ

1. はじめに

中国語母語話者の日本語使用において、日本語母語話者なら本来受身文を用いるべきところに、他動詞文が用いられるという誤用が多く見られている。例えば、「交通事故の多発に対して安全運転活動（→安全運転キャンペーン）がおこなないました→おこなわれました」¹（市川 1997 : p. 146）。一方で、日本人の中国語学習者による中国語の誤用例も顕著である。例えば、“*委员会被召开了”（→召开了）（郭 2001 : p. 227）。ここでは、能動文を用いるべきところに、“被召开”（開催される）という受身文が用いられている。先行研究では、上記のような誤用や言語現象が指摘されてはいるものの、語彙レベルに留まっている。本稿では、以上のようなずれが生じるのは語彙的な問題ではなく、動詞のタイプによる一般的なものであることを証明する。さらに、動詞のタイプで日本語の直接受身文と中国語受身文の成立を考察し、両者の成立条件を明にした上で、ずれが生じる原因を解明したい。

また、中国語の受身文は他動詞であれば成立するのではなく、動詞に結果補語などが必要とする場合がある。中国語受身文にさまざまな成立条件が指摘されているが、一貫

した解釈はまだ得られていない。本稿²では、中国語受身文の条件を考察し、統合的に説明することを試みる。

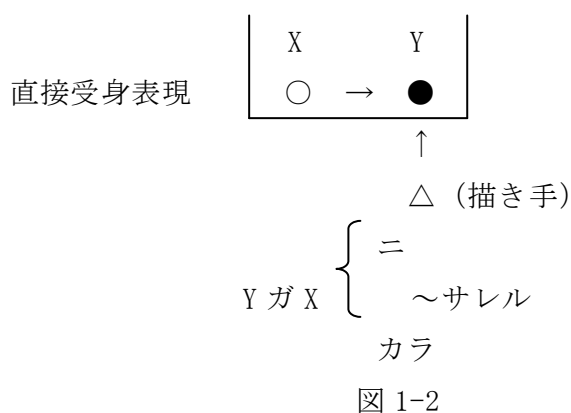
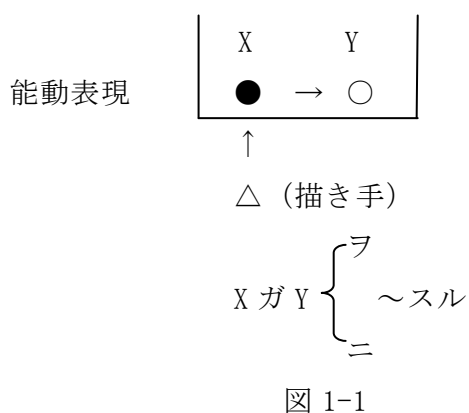
2. 先行研究

寺村（1982）では、受身文を以下のように定義している。

受身というのは、要するに、動作・作用の主体が、他の何ものかに働きかける場合に、動作主、つまり動きの発するところを主役とするのではなく、動きを受けるもの、動きの向かう先を主役として事態を描く表現であるが、それが文法的に受動態と認定されるためには、（それぞれの言語で）一定の形態的、統語的、意味的な特徴を具えていなければならない。

（寺村 1982 : P. 212）

この論文では、日本語の受身文を「直接受身文」と「間接受身文」に分類している。「直孝ハ祖母ニ育テラレタ」（図 1-2）³のような文は「直接受身文」とされる。意味的に「祖母」は「直孝」を目ざして「育テル」という行為をし、裏を返せば「直孝」は「祖母ガ育テル」という直接な影響を受けるものと言える。統語的には「祖母ガ直孝ヲ育テタ」（図 1-1）という対応する能動文を持つ。なお、「直孝ハ五歳ノトキ父母ニ死ナレタ」（図 1-3）のような文は「間接受身文」とされる。「両親」は“単に”「死ンダ」であり、「直孝」を目ざして「死ンダ」わけではないため、「直孝」は「両親ガ死ンダ」から間接な影響を受けるという意味的な特徴を持つ。また、「*両親（父母）ガ直孝ヲ死ンダ」が成立しないことから、対応する能動表現を持たないという統語的な特徴があると述べている。以上の基準により、「アーサー王子が両親をラビット王に殺された」（図 1-4）という文は「間接受身文」に分類される。



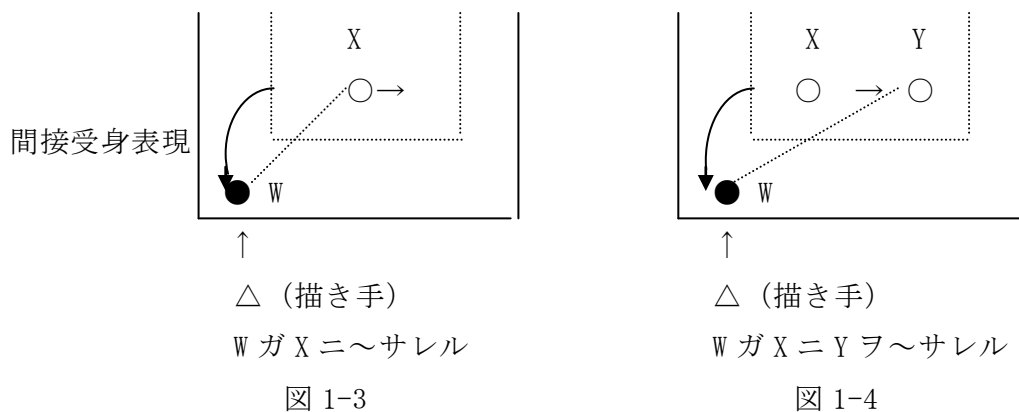


図 1 直接受身文と間接受身文

寺村 (1982 : P. 247)

本稿は寺村 (1982) の受身文の分類に従い、意味的に対象が直接的な影響を受ける及び統語的に能動文に置き換えられるなどの、直接受身文を考察対象とする。

日本語の受身文が成立する動詞について、三上 (1953) は次のように指摘している⁴。

表 1 動詞のタイプと受身文の成立

動詞の自他の区別		受身	
		まともな受身 (直接受身)	はた迷惑受身 (間接受身)
所動詞		×	×
能動詞	他動詞	○	○
	(能動の) 自動詞	×	○

本稿で対象にする「太郎は次郎に殴られた」といった直接受身文は、動詞のタイプで見ると、表で示したように能動詞である他動詞によって成立する。

自動詞文と受身文は意味的に近い場合がある。例えば、橋本 (1969) では、主語が無情のもの場合は「自らさうなつたという感じの方がつよいのである。」(p. 282) と指摘している。自発の意味を表す場合は、受身文は自動詞文に似た意味を有するのであり、特に他動詞に対する適当な自動詞がない場合、他動詞の受身形は自動的に用いられると示唆している。

益岡 (1987) では、動作主が顕現しない文を「降格受動文」⁵と呼び、この降格受動文の中には、他動性があまり感じられない自動詞表現に近似するものもあると指摘している。例えば、「今回の調査の結果、原因が解明された。」がそれであり、「今回の調査の結果、原因が明らかになった。」という自動詞表現に類似する。この論文 (p. 184) では橋本の説を受け継いで、降格受動文が、往々にしてある種の自動詞文と同様に、自発の表

現とみなすことができる」と述べている。

以上で挙げた橋本（1969）、益岡（1987）のいずれも、このタイプの文について自発の意味を表すという指摘があったが、「受動文」という立場を取っている。本稿も、このタイプの文は隠れた動作主が存在することと、対応する能動文に還元できることから「受身文」と定義する。益岡（1987）に挙げた「原因が解明された」という例文を借りれば、「原因が彼らによって解明された。」のように、動作主である「彼ら」が表すことができる。また、「彼らは原因を解明した。」という対応する能動文が存在している。

日本語の無対他動詞受身文について、橋本（1969）の説と同じように、一般的に自動詞の「穴埋め」だという認識がある。市川（1997）では、中国語母語話者による「*安全運転キャンペーンが行いました」という誤用の原因について、中国語は自他同形動詞であるため、自動詞として使えるものの、日本語では他動詞しか存在しないために、自動詞の代わりに他動詞の受身文を用いると指摘している。

次に中国語受身文の先行研究を紹介する。先行研究は多いが、中国語受身文の厳密な定義がされておらず、分類も研究者によって異なるというのが現状である⁶。いずれにせよ、中国語受身文の“被”などのマーカーを持つ受身文は典型的なタイプであることは議論する余地がない。木村（1992）では“椅子让小王拉倒了”（椅子が王君に引き倒された）といった受身文を「SNP+BEI+BNP+VP」のように図式化し、要素の間の意味関係についてこのように説明した上で、その定義を行っている。「主語の位置に、動作の影響を被る対象を表す構成素（以下 SNP と記す）が立ち、動作の担い手を表す構成素（以下 BNP と記す）が前置詞“被、叫、让”のいずれか（以下 BEI と記す）に伴われて非主語の位置に立つタイプの構文」（p. 10）

本稿では、中国語受身文の定義は木村（1992）に従う。ただし、“叫、让”は使役マーカーも兼ね、主に話し言葉で用いられており、直接動詞の前に置かれることは少ない。“被”は受身専用のマーカーであり、話し言葉も書き言葉も用いられることから、本稿では、“被”マーカーの受身文だけを考察対象とする。

中国語における受身文の成立条件について言うと、他動詞でさえあれば必ず受身文が成立するというわけではない。中国語受身文の成立は結果と密接な関係を持っていると言われている。

例えば、豊嶋（1988）では、中国語受身文の成立条件の一つとして、以下のように述べている。「述語が動作・行為を受けた受事側の結果状態にまで言及し得る表現となっていること。〔結果・状態補語⁷や“了”“着”の付加、或いは動詞自体がそのような意味を持つ〕」（P. 107）

具体的に、楊（1992）では、中国語の能動文を受身文にする場合、“*我被他打。”（私は彼に殴られる。）のように動詞だけでは不適格の表現となり、“我被他打了。”（私は彼に殴られた。）“我被他打过。”（私は彼に殴られたことがある。）のように“了”、“过”をつけて初めて自然な文となると述べている。“打”（殴る）のような結果含意動詞の場合

は、完了を表す“了”や経験を表す“过”を付けるだけで成立する。また、“*小陈被大家选了。”（陳さんはみんなによって選ばれた。）での“选”のような動詞は“了”をつけ加えても、「選ぶ」という働きかけが完了したことは表すが、「当選する」という結果の実現は含意しないため、成立しないとしている。この場合は、“小陈被大家选上了。”のように結果補語“上”を付け加えることによって自然な文となる。さらに、“玻璃被砸得粉碎”（ガラスはこなごなに割られてしまった。）のように、“了”がなくても程度補語“粉碎”（こなごなに）で文を成立させることができることも述べている。つまり、結果の実現を含意する動詞においては、完了を表すアスペクト“了”或いは経験を表す“过”を付け加えれば、受身文は成立するのである。一方、結果の実現を含意しない動詞の場合は、動詞に結果補語或いは程度補語の付くことが要求される。さらに、通常受身文が成立しない自動詞“坐”（座る）も、次の形で表される場合、受身文が成立すると述べられている。“被他这么一坐，我什么也看不见了。”（彼にこうして座られると、何も見えなくなってしまった。）

木村（1992）も、「中国語の受身文は、主語に立つ対象が単に<動作・行為>を受けることを述べるだけでは成立し難く、対象が動作・行為の結果被る何らかの<影響>を明示的に表現するか、或いは何らかの形でそれを強く含意する形のものでなければ成立しがたいという性格を持っている。」と述べている。先述した先行研究であげた“了”と結果補語のほかに、「量的な限定」も中国語の受身文の成立条件の一つであると述べている。例えば、“桌子叫小李拍了两下。”（机が李君に二度叩かれた）のように、量的な限定を加えることで、受動文は成立する。動詞“拍”（叩く）は結果含意から見ると中間的なもので、“两下”（二回）という量的な限定を加えることで、「より具体的、個別的な行為像を描出する効果が生み出され、そのことが動作本来の他動性と相まって、対象への即物的な影響を含意し得る結果につながる」としている。しかし、なぜ「数量的限定」を加えることにより「具体的、個別的な行為像が描出され」、どのように「結果につながる」のかまでは言及していない。

以上の先行研究で、中国語受身文の成立には動作・行為の結果が密接に関係していることが分かる。動詞自体が結果含意であるか、完了を表す“了”、動作の進行中や状態を表す“着”、経験を表す“过”などが動詞について受身文を完成させる。または、結果補語や様態補語で結果、状態を表して受身文を成立させる。しかし、木村（1992）が挙げた量的な限定と、楊（1992）が挙げた“被他这么一坐”（彼にこうして座られ）とでは、結果とどのような関係を持っているのか、まだはっきりした説明がなされておらず、散発的な観察となっている。結果の重要性はよく指摘されているものの、なぜ中国語の受身文において結果を必要とするのかが論じられていない。

以上の問題を踏まえ、3. では、結果などの中国語受身文の条件における一貫した説明を試みる。また、中国語の受身文についての研究は多いものの、いずれも成立する受身文を考察対象としている（楊 1992、木村 1992、李 1993）。本稿は、成立しにくいものに

関しても焦点をあて、その特徴を解明する点において、より中国語受身文の本質に迫るものだと言える。

3. 中国語受身文の成立条件

ここでは、中国語の受身文の成立条件を検討する。3.1 で受身文が成立するものを見てみる。

3.1 中国語受身文の成立しやすいもの

3.1.1 裸動詞で成立するもの

「“被” + 動詞」で成立する受身文がある。

- (1) 去年年底他们厂有个女孩在厂里的扩建工地上被杀。(拿)⁸
(去年年末彼の工場で女の子が工場の増築現場で殺された。)
- (2) 以往5届比赛冠军都被日本棋手获得。(CCL)
(過去5回試合のチャンピオンはすべて日本棋士に獲得された。)
- (3) 东面的华北平原地区断裂下陷，被海水淹没。(CCL)
(直訳：東の方の華北平野地区は切れて陥没して、海に浸されて沈んだ)
(意訳：東の方の華北平野地区は切れて陥没して、海に浸って沈んだ)

これらはいずれも裸の動詞で受身文が成立しており、新聞などの書き言葉でよく見られる。(1)の動詞“杀”(殺す)⁹は対象である“女孩”(女の子)が死ぬという結果を含意している¹⁰。(2)の“获得”(獲得する)も「日本の棋士がチャンピオンになる」ことを含意している。(3)の“淹没”は一語である¹¹が、その形式と意味は「動詞+結果補語」に似ている。それぞれ、“淹”は「水浸しになる」という行為を表しており、“没”は「沈没する」という結果を表している。

以上の例は、動詞自体或いはその一部が結果を含意しているため、裸動詞で受身文が成立するものである。このタイプの動詞は生産性が低く、使用環境も書き言葉に限定されている。

3.1.2 “着”、“了”、“过”で成立するもの

- (4) a. 那封信还被他保存着。
(その手紙はまだ彼に保存されている。)

b. *那封信还被他保存。

(その手紙はまだ彼に保存される。)

(5) a. 他被女朋友甩了。

(彼は彼女に振られた。)

b. *他被女朋友甩。

(彼は彼女に振られる。)

(6) a. 这些方法都被他试过。

(これらの方法はすべて彼によって試されたことある。)

b. *这些方法都被他试。

(これらの方法はすべて彼によって試される。)

これらの動詞は、アスペクトに持続を表す“着”、完了を表す“了”、経験を表す“过”などを付けることで受身文が成立する。従って、(4b) ~ (6b) の裸の動詞はすべて成立しない。

楊凱榮 (1992) は、能動文と受身文に見られる文法的な相違から受身文の条件を導き出した。この論文では、“打”を例に挙げて、(7a) の能動文では、動詞は裸のままでは成立するが、受身文にすると、(7b) のように不適格な表現となり、(7c) 或いは (7d) のように“了”、“过”の付加が必要となる。そのため、“了”、“过”は中国語受身文の文法的な条件の一つであると指摘している¹²。

(7) a. 他打我。

(彼が私を殴る。)

b. *我被他打。

(私は彼に殴られる。)

c. 我被他打了。

(私は彼に殴られた。)

d. 我被他打过。

(私は彼になぐられたことがある。)

(楊凱榮 1992 : 322)

これまでの研究では、主に「結果」という視点から論じられている¹³。(木村 1981、杉村 1981、豊嶋 1988、木村 1992、楊凱榮 1992)

例えば、豊嶋 (1988) では、受身文の述語に関する文法的な成立条件について、以下のように述べている。「述語が動作・行為を受けた受事側の結果状態にまで言及し得る表現となっていること。[結果・状態補語や“了”“着”の付加、或いは動詞自体がそのような意味を持つ]」(豊嶋 1988 : 107) すなわち、“了”を付加することによって結果が生

じる動詞は、“了”を付けるだけで受身文が成立するのである。そうでない動詞には、結果補語などの付加成分が必要であると指摘している。

これらのマーカーについて、従来指摘されてきたアスペクトの機能のほかに、次のような相違も見られる。

例えば、(8)は「鳥は草の種を食べる動物である」という一般真理で、概念的なことを表すのに対して、(9)は現実起きた出来事のことを表している。このように、“了”が付加することで概念的なことから現実的なことになる。

- (8) a. 鸟吃草籽。
b. 鳥は草の種を食べる。
- (9) a. 鸟吃了草籽。
b. 鳥は草の種を食べた。

これらの文を受身文にすると、以下に見られるように、中国語も日本語も概念的なことを表す(10)は受身文が成立しないが、現実的なことを表す(11)はいずれも受身文が成立する。

- (10) a. *草籽被鸟吃。
b. *草の種は鳥に食べられる。
- (11) a. 草籽被鸟吃了。
b. 草の種は鳥に食べられた。

大河内(1997)では、“John reads a book”という格言、一般真理などのことしか表さない表現を「素表現」と名づけ、動詞の前後の成分をも含め、構造として具象性を捨象した未完結表現であると述べている。中国語の条件句¹⁴(例えば、…するなら…)と譲歩句(例えば、…したとしても…)において、従属節に「未然表現」、「不確定表現」、「主語をもたぬ」が要求されることは、「抽象レベルでの表現」であり、つまり「素表現」であると指摘している。さらに、他動詞文の埋め込み、“把”構文や“了”と“啦”の振る舞いの相違¹⁵などの説明において「素表現」が有用であり、この考えが中国語の根底にあると示唆している。

木村(2006)では、大河内(1997)の「素表現」の考えを継承し、対立する「実存相」という概念を導入し、「北京官話」における“了”、“着”を考察した。また、「事柄や事物に時間的もしくは空間的実存性を付与することで、それらを具体化し、個別化する機能を担っている」形式を「実存相」であるとしている。更に従来アスペクトの機能を担うとされてきた動詞接辞の“了”、“着”を「実存相」の範疇に属すると述べている。

木村(2006)が提案した「実存相」は、名前も考察範囲もアスペクトに限定されてい

る。しかし、大河内（1997）で述べられたように、「素表現」という概念は中国語の根底にある。よって、もっと広く捉えられるべきであると考ええる。

本稿では、「素表現」に対立する概念として「リアリティ」を提案する。また、現実世界に起こる個別的、具体的な事態をリアルに表現することを「リアリティ」と定義することにする。中国語と日本語の受身文の成立は、前述したように（10）と（11）に見られるような対立を「リアリティ」の観点からを見ることができる。つまり、（10）の「素表現」は受身文が成立しないが、（11）のリアリティを持つ表現は成立する。

3.1.3 結果補語、様態補語などで成立するもの

以下の（12a）～（14a）は動詞に“了”を付けても成立せず、仮に成立させるには（12b）～（14b）のように、結果補語を付けなければならない。

このような言語現象について、木村（1981）では、中国語受身文の成立条件の一つは「結果」とであると指摘している。楊凱榮（1992）では、その原因はこのような動詞は働きかけを表し、“了”を付けても働きかけの完了しか表せず、結果の実現を含意しないため、なんらかの補語を付けなければならないと指摘している。

- (12) a. *方案被征集了。(アイデアが募集された。(日))
b. 方案被征集到了。(アイデアが募集されて集まった。)
- (13) a. *钱一捆一捆被数了。(お金が一束一束数えられた。(日))
b. 钱一捆一捆被数好了。(お金が一束一束ちゃんと数えられた。)
- (14) a. *毕业典礼上校歌被唱了。(卒業式で校歌が歌われた。(日))
b. 毕业典礼上校歌被唱错了。(卒業式で校歌が間違えて歌われた。)

（12a）～（14a）の文で見られるように、動詞に“了”を付けるだけでは、受身文は成立しない。これらの動詞はあくまでも行為を表すものであり、“了”を付けても、行為の完了を表すが、結果は含意されない。先行研究で述べたように、中国語の受身文は結果と密接な関係があるため、結果を含意しない動詞だけでは受身文が成立しない。それぞれ、結果補語“到”、“好”、“错”を付加することで受身文を成立させる。例えば、（12a）の“征集”（募集する）は行為を表す他動詞であり、“了”を付けると募集する行為が完了したことを表す。結果補語“到”を付けると、「アイデアが入選した」という結果が含意される。（13b）の“好”に関しても「数えてある」という結果の意味が含まれる。また、（14b）のように、歌った結果「間違えた」という意外な結末の場合は成立しやすい。これらの結果補語は、動作・行為がもたらした結果をリアルに述べていると考えられる。

- (15) a. *那个曲子被他弹了。

- (その曲が彼によって弾かれた。)
- b. 那个曲子被他弹得引人入胜。
 (その曲は彼によって人をうっとりさせるほど弾かれた)
- (16) a. *他作为美国外交战略家的那种“无可挑剔的直觉”被描写了。
 (彼のアメリカの外交戦略家としての「指摘すべきものない直感」は描かれた。)
- b. 他作为美国外交战略家的那种“无可挑剔的直觉”被描写得淋漓尽致。(CCL)
 (彼のアメリカの外交戦略家としての「指摘すべきものない直感」は微に入り細をうがっているほど描かれた。)

以上の動詞“弾”(弾く)(15a)、“描写”(描く)(16a)も行為を表す動詞であるため、“了”を付けるとても行為の完了しか表さない。そのため、受身文は成立しないことになる。動詞に様態補語“引人入胜”(人をうっとりさせる)(15b)、または“淋漓尽致”(微に入り細をうがっている)(16b)を付けて、受身文を成立させているのである。これらの様態補語は行為がもたらした結果を具体的に、リアルに描写することにより、受身文を成立させるのであろう。

3.1.4 中国語の受身文とリアリティ

- (17) a. *椅子让小王拉了。
 (いすが王君に引かれた。)
- b. 椅子让小王拉了一把。(木村 1992)
 (いすが王君に〔グイと手で〕一回引かれた。)
- (18) a. *桌子叫小李拍了。
 (机が李君にたたかれた。)
- b. 桌子叫小李拍了两下。(木村 1992)
 (机が李君に二度たたかれた。)
- (19) a. *被她坐、我什么都看不见了。
 (彼に座られると、何も見えなくなった。)
- b. 被她这么一坐、我什么都看不见了。(楊 1992)
 (彼にこうして座られると、何も見えなくなった。)
- (20) a. *被她哭、我不知道怎么办才好了。
 (彼女に泣かれてしまうと、どうしたらいいか分からなくなった。)
- b. 被她这么一哭、我不知道怎么办才好了。(楊 1992)
 (彼女にこうして泣かれてしまうと、どうしたらいいか分からなくなった。)

以上の(17a)～(20a)はいずれも文として成立しない。(17b)、(18b)は量的限定“一

把”（一回）“两下”（二回）を、(19b)、(20b)は“这么一”（こうして〜と）を加えることで、はじめて受身文が成立する。(17b)、(18b)は量的限定により、「より具体的、個別的な行為像を描出する効果が生み出される」（木村 1992）。(19b)、(20b)の“这么一”（こうして〜と）も同様な働きを持つものと考えられる。行為をリアルに具体的に描くことにより、受身文を成立させていると考えられる。

以上の文は具体化したことによって、リアリティを持つものになる。論じてきた結果もリアリティにつながるものと思われる。ほかにも抽象的なものが成立しにくく、具体的なものは成立しやすい。

(21)～(23)は抽象的な出来事であり、中国語の受身文が成立しない。これに対して、(24)～(26)は具体的なイベントであり、リアリティを有するため中国語の受身文が成立する。前者は、いわゆる抽象的で概念的なものである。これに対して、リアリティは具体的で、現実世界において起こった一回きりのイベントである。例えば、「何が起こった？」という質問に対して、(21a)～(23a)は答えにならないが、(24a)～(26a)は答えになりやすい。前者は概念的なことを意味しており、後者は現実世界で起こったイベントを意味しているからである。

(21) a. キリスト教は多くの国で信じられている。(日)

b. *基督教在很多国家被信仰。

(22) a. ブラジルではポルトガル語が話されている。(日)

b. *在巴西葡萄牙语被说。

(23) a. 鼻濁音は語中で発音される。(日)

b. *鼻浊音在单词中间被发音。

(24) a. 僕は女房に信じられていない。(日)

b. 我不被老婆信任。

(25) a. そのことはマネージャによって話された。(日)

b. 那件事被经纪人说出去了。

(26) a. その音は彼によって間違っ発音された。

b. 那个音被他发错了。

また、下記の(27)のように、未来のことは現実において起こったものではなく、推量を表す“会”(27b)、“要”(27c)などのモダリティ的な表現を必要とする。一方、(28)の能動文はいずれも成立する。

(27) a. *你不写作业，被妈妈说。

(あなたは宿題しないと、母に怒られる。)

b. 你不写作业，会被妈妈说。

- (あなたは宿題しないと、きっと母に怒られる。)
- c. 你不写作业, 要被妈妈说。
(あなたは宿題しないと、母に怒られるだろう。)
- (28) a. 你不写作业, 妈妈说你。
(あなたは宿題しないと、母に怒られる。)
- b. 你不写作业, 妈妈会说你。
(あなたは宿題しないと、きっと母に怒られる。)
- c. 你不写作业, 妈妈要说你。
(あなたは宿題しないと、母に怒られるだろう。)

以上の考察から、次のようなことを明らかにした。中国語では受身文が成立するものは、結果性の強い動詞の場合、“了”、“着”、“过”で受身文が成立することができる。結果性が明確でない場合は、動詞に結果補語、様態補語を付けて受身文を成立させる。また、量的限定などの手段によってイベントを具体化することで受身文を成立させている。結果と具体化はリアリティにつながるものと考えられる。

3.2 中国語受身文の成立しにくいもの

日本語では他動詞で受身文を自然に作れるが、中国語には受身文が成立しにくいものがある。3.2 では受身文が成立しにくい動詞のタイプについて、成立しにくい原因を検討していく。

3.2.1 持続を表す動詞

以下の動詞は繰り返しか持続を表している。(29a)、(30a)の受身文が成立せず、(29b)、(30b)の能動文で表す。

- (29) a. *干杯被 重复/反复 了几次。
(乾杯が繰り返された。(日))
- b. 干了几杯。
(何杯か飲み干した。)
- (30) a. *演讲被持续了三个小时。
(講演は3時間も続けられた。(日))
- b. 演讲持续了三个小时。
(講演は3時間も続いた。)

アスペクトにおいて持続と結果は対立しており、中国語の受身文では結果は一つの条件であるため、持続を表す動詞は受身文で表せないだろう。

3.2.2 イベントを表す動詞

本稿では、「行う」、「開始する」などの催しを実施することを表す動詞を「イベントを表す動詞」と定義する。(31a)のように主語に催しを表す名詞が現れることが多い。

- (31) a. 全国ツアーが開始された。
b. 太郎が殴られた。

まず、(31a)と(31b)の日本語はどのような相違があるのか明らかにしなければならない。(31b)の主語に立つ「太郎」が外的な働きかけを受けたことを表すのに対して、(31a)はそのような意味合いを持たない。

このような意味的な相違は以下のように形式的にも反映されている。(32a)の動作主「次郎」が顕現することができるが、(32b)の動作主である「あの歌手」も「レコード会社」も顕現しにくいのである。益岡(1987)の用語では、(32a)は「昇格受動文」であり、(32b)は動作主が顕現しにくいもの或いは非ニ格(例えばニヨッテ格)で動作主を導く「降格受動文」である。降格受動文の中には、他動性があまり感じられない自動詞表現に近似するものもあると述べている。

- (32) a. 太郎が次郎に殴られた。
b. ?全国ツアーがあの 歌手/レコード会社 によって開始された。

なぜこのタイプの受身文は外的な働きかけという意味を感じさせないのだろうか。下記の(33a)の能動文においては、「あの歌手」が「全国ツアー」に働きかける他動性を感じる。しかし、受身文にする時、(33b)のように動作主が顕現しにくい。(33c)の動作主が顕現しない受身文にする場合でも、他動性を感じられない。動作主が存在するが、イベントの外部にいるわけではないため、外的な働きかけを受けるという意味が生じないと考えられる。

- (33) a. あの歌手が全国ツアーを開始した。
b. ?全国ツアーがあの歌手によって開始された。
c. 全国ツアーが開始された。

次に自動詞文は無対他動詞の受身文とどのような相違があるのか検討してみる。(34)

の文はいずれも成立するのに対して、(35a)の自動詞文は言えるが(35b)の他動詞受身文は成立しない。(34)は人が関わるイベントであり、(35)は自然現象であるという相違がある。つまり、自動詞文は自然現象を表すこともでき、人が関わっている出来事であっても動作主を問題にしない時に用いられる。一方、受身文は通常、人が関わる出来事を表す。

- (34) a. 全国ツアーが始まった。
- b. 全国ツアーが開始された。
- (35) a. 梅雨が始まった。
- b. *梅雨が開始された。

また、同じ人が関わる出来事であっても、人の積極的な関与度により、異なりが見られる。例えば、(36)の「ツアーが始まる」場合は、開催者の積極的な関与がないと始まらない。一方、「ツアーが終わる」場合は、開催者の積極的な関与がなくても自然に終わることができる。(36b)、(36c)と対照的に、(37b)の受身文は成立しないが、(37c)の自動詞文は成立する。

- (36) a. 全国ツアーが始まった。
- b. 全国ツアーが開始された。
- c. *全国ツアーが開始した。
- (37) a. 全国ツアーが終わった。
- b. *全国ツアーが終了された。
- c. 全国ツアーが終了した。

以上の考察で、次のようなことが分かった。日本語では人が関与する出来事の場合は受身文を用いる。一方、自然現象の場合と人が関与する出来事で動作主を問題としない場合は自動詞文を用いる。さらに、人が関わる出来事であっても、積極的に関与するという意味が読み取れない場合も自動詞文を用いる。

次に、中国語ではどのような対応をしているのかをしてみる。

- (38) a. 会議が開かれた。
- b. *会议被召开了。
- (会議が開かれた)
- c. *会议被开得很成功。
- (会議が成功に開かれた)
- d. 会议召开了。

(会議は開いた)

(38b) の中国語の受身文は非文となり、様態補語“很成功”(成功)で結果を明示したとしても(38c)は成立し得ない¹⁶。このことから、外的働きかけは結果より強い制限であることが分かる。(38a)の状況を中国語で表す時、(38d)の自動詞文となる。

- (39) a. 2月, 外交関係樹立10周年が祝われた。(現)
b. *2月建交10周年被庆祝了。
c. 2月庆祝了建交10周年。
- (40) a. 華々しい結婚式が挙げられた。
b. *豪华的婚礼被举行了。
c. 他们举行了豪华的婚礼。
- (41) a. 12月に大連において行われた第1回会合では、日中双方の委員の間で活発な議論が行われ¹⁷、日中関係を長期的・大局的観点から捉えていくことの重要性につき共通認識が得られた。(現)
b. *12月在大连举行的第一次会谈, 日中双方的委员之间活跃的讨论被进行了。对于日中关系要从长期、大局着眼的重要性得到了共识。
c. 12月在大连举行的第一次会谈, 日中双方的委员进行了活跃的讨论。对于日中关系要从长期、大局着眼的重要性得到了共识。

以上の文も日本語は受身文が成立するが、中国語では受身文が成立せず、(39c)～(41c)の他動詞文で表す。このように、中国語は「全国ツアーが開始された」というタイプの日本語受身文には対応せず、それぞれ自動詞文、他動詞文となる。

以上の考察から、日本語のイベントを表すものにおいて、中国語とずれがあるのが分かった。このタイプの受身文は、動作主がイベントの内部に存在するため、外的な働きかけを感じさせない。すなわち、動作主が受身文に顕現しにくいのである。このように、外的な働きかけがない場合でも、日本語は受身文が成立するが、中国語では成立しにくいことが分かる。外的な働きかけは中国語受身文の成立条件の一つであると言えよう。この場合は結果を明示しても受身文が成立しないため、外的な働きかけという制限は結果より強いものと思われる。外的働きかけにおいて、日中両言語の受身文における隔たるところであると考えられる。

3.2.3 生産動詞

本稿では、物などをなかった状態から存在する状態に作り出すことを表す動詞を生産動詞と呼ぶ。例えば：“发明”(發明する)、“建”(建てる)。

- (42) a. 装飾など一切ない、実用本位の「自動車」が製造された。
 b. *没有任何装饰、实用的汽车被生产出来了。
 c. 没有任何装饰、实用的汽车生产出来了。
- (43) a. 新しい技術が發明されました。(庵 2008 例文)
 b. ?新技术被发明出来了。
 c. 新技术发明出来了。
- (44) a. 大阪城は豊臣秀吉によって建てられた。
 b. ??大阪城是被丰臣秀吉建成的。
 c. 大阪城是由丰臣秀吉建成的。

日本語の生産動詞の受身文が成立する。(44c)のように動作主が顕現する時、「によって」導かれる。中国語においては、(42b)～(44b)のように受身文が成立しにくく、(42c)、(43c)のような自動詞文、または(44c)のような“由”構文で表す。

このように、生産動詞においても、日中両言語の受身文のずれが見られる。なぜ中国語の生産動詞は受身文が成立しにくいのだろうか。生産動詞の定義で示したように、なかった状態からある状態になるからである。

以下の例にも見られるように、(45a)の受身文の主語はすでに存在している穴の状態のことを指す。(45b)は結果補語が伴う文であり、“坑”(穴)はもともとない状態から掘ることを表しており、受身文が成立しにくい。(45c)の意味上の受身文、(45d)の主語化構文の場合は、このような制限がなく、いずれも成立する。

- (45) a. 坑被挖了。
 (穴が掘り返された。)
 b. ??坑被挖好了。
 (穴が掘られてできた。)
 c. 坑挖好了。
 (穴は掘り終えた。)
 d. 坑挖了。
 (穴は掘った。)

このように、中国語受身文の主語になるものは、通常すでに存在しているものでなければならないという制限が働く。日本語にはこのような制限がなく、受身文が成立する。

以上のような傾向は一部の非対格文にも見られる。中国語の主語は変化が生じる前の「水」を表す(46a)、日本語では変化が生じた後の「お湯」を表す(47b)のように、それぞれ特徴的な異なりが見られる。

- (46) a. 水开了。
b. *水が沸いた。
- (47) a. *热水开了。
b. お湯が沸いた。

日本語では生産動詞の受身文が成立するが、中国語では成立しにくい。これは、中国語には受身文の主語がすでに存在しているという制限が働くが、日本語にはこのような制限が働かないからである。

3.2.4 心理動詞

李臨定（1990）は心理動詞を以下のように定義している。“凡表示喜爱、怨恨、感觉、认知、遗忘等和心理活动密切有关的动词，称为心理活动动词。”（P.249）（凡そ好き、恨む、感覚、認知、忘れるなどの心理の動きと密接な関係を表す動詞を心理動詞と呼ぶ。）

また、工藤（1990）は、日本語の動詞における他動性の強さを基準に、a、b、c の3つのタイプに分けた。a タイプは最も他動性が強く、能動⇄受動の対立があるが。c タイプには他動性がなく、「(ら)れる」という受動形は受動性を表さず、自発性を表すと指摘している。その間に存在する b タイプは「受動性を表す場合もあれば、自発性を表す場合もあってゆれることになる」（p.63）と示唆している。

工藤（1990）では、以上の心理動詞の定義に適すると思われる動詞について、主に二つのタイプが挙げられている。

一つは「対象に対する積極的な心的態度を表すもの」（p.62）である。このような動詞は受身文が成立する a タイプに属しているとし、さらに「叱る」、「ほめる」のような動作的な動詞と「(～ヲ)愛する」と「(～ニ)感心する」のような状態的な動詞に分類している。本稿では、「対象に対する積極的な心的態度を表すもの」を「他動的的心理動詞」として、その下位分類をそれぞれ「他動的動作心理動詞」、「他動的状態心理動詞」と呼ぶことにする。

もう一つは「対象へのはたらきかけ性がないもの、あるいはむしろはたらきかけをうけるもの」（p.63）であり、受身文が成立しにくい c タイプに属するものとしている。例として「(～ヲ)感じる」、「(～に)驚く」が挙げられている。本稿では、このタイプの動詞を「受動的的心理動詞」と呼ぶことにする。

これらの心理動詞をそれぞれ中国語と対照させて考察する。まず、他動的的心理動詞に焦点をあてる。以下の(48)、(49)は他動的動作心理動詞であり、(50)、(51)は他動的状態心理動詞である。

- (48) a. 太郎は花子に叱られた。

- b. 太郎被花子骂了。
- (49) a. 花子は先生にほめられた。
- b. 花子被老师表扬了。
- (50) a. 太郎は花子に愛されている。
- b. *太郎被花子爱。
- (51) a. 太郎は花子に恐れられている。
- b. *太郎被花子害怕。

以上の例で見られるように、日本語はいずれも成立するが、中国語においては、(48)、(49)の他動的動作心理動詞の場合は成立しやすいが、(50)、(51)の他動的状態心理動詞の場合は成立しにくい¹⁸。つまり、心理動詞の場合も、日本語は中国語より成立しやすいのである。

次に、日本語の受動的心理動詞の受身文を中国語と対照させて考察する。

- (52) a. 太郎は自分の無知を感じた。
- b. *自分の無知は太郎に感じられた。
- (53) a. 太郎感到自己很无知。
- b. *自己的无知被太郎感到了。
- (54) a. 太郎はこの件に困っている。
- b. *この件は太郎に困られている。
- (55) a. 太郎很为难这件事。
- b. *这件事被太郎为难。

工藤(1990)でも述べたように、このタイプの日本語の動詞は受身文が成立しにくい。また、上記の例文からも分かるように、中国語も成立しにくく、日本語と対応しているものと言える。工藤(1990)の説を借りれば、受動的心理動詞は他動性を持たず、むしろ働きかけを受けるものであるため、成立しにくい。

しかし、次のような対応しないものも見られる。

- (56) a. *私は映画の主人公に感動された。
- b. 我被电影的主人公感动了。
- (57) a. *私は太郎に驚かれた。
- b. 我被太郎吓了一跳。

以上の文は日本語受身文が成立しないが、中国語は受身文が成立する。一見して、これまで述べてきた日本語は受身文が成立しやすいという傾向の反例になる。なぜこのよ

うなことが起こったのか考察してみる。

日本語では、これらの心理動詞「感動する」、「驚く」はいずれも受動的心理動詞であるため、成立しない。しかし、以下の「感動させる」、「驚かす」のような他動的動作心理動詞の受身文にすると、成立する。

(58) 私は映画の主人公に感動させられた。

(57) a. 私は太郎に驚かされた。

一方、なぜ中国語の“感动”（感動する），“吓”（驚く）は受身文が成立するのか見てみる。

(58) a. 我很感动。

b. 私は感動した。

c. 电影的主人公感动了我。

d. 映画の主人公は私を感動させた。

(59) a. 我吓了一跳。

b. 私は驚いた。

c. 太郎吓了我一跳。

d. 太郎は私に驚かせた。

中国語の自動詞文（58a）、（59a）も他動詞文（58c）、（59c）も同様の動詞を用いている。これに対して、日本語では、自動詞文は「感動する」（58b）、「驚く」（59b）を用いるが、他動詞文では「感動させる」（58d）、「驚かす」（59d）も用いている。つまり、これらの中国語の動詞は自・他同形であるが、日本語では自動詞と他動詞それぞれ違う動詞で表しているのである。このような日中両言語のずれは中国語母語話者の「映画の主人公に感動された」（馮 1999）といった誤用の原因であると考えられる。

（56b）、（57b）の中国語の“感动”、“吓”は意味的に「感動させる」、「驚かす」に対応するものであり、他動的動作心理動詞である。このことから、前述した規則に沿う表現であることが分かる。

心理動詞の日中受身文の特徴をまとめると、日本語では他動的心理動詞は受身文が成立しやすいが、受動的心理動詞は受身文が成立しにくい。一方、中国語では、他動的心理動詞はすべて成立するのではなく、動作的心理動詞の場合は成立しやすいが、状態的心理動詞の場合は成立しにくい。更に受動的心理動詞も成立しにくいと言える。言い換えれば、日本語では他動性が高い心理動詞が成立しやすいが、他動性のない心理動詞は受身文が成立しにくいのである。一方、中国語では他動性が高い、かつ動作性の心理動詞のみ成立しやすい傾向がある。心理動詞の場合も、日本語は中国語より受身文が成立

しやすいと言える。

3.2 で中国語の受身文が成立しにくいものを取り上げて考察し、以下のことを浮き彫りとした。日本語では、持続を表す動詞も、イベントを表す動詞、生産動詞も受身文が成立する。しかし、中国語ではいずれも成立しにくい。その原因は以下のように考えられる。①持続動詞は、中国語受身文の条件である結果と対立しているため、受身文で表せない。②イベントを表す動詞の場合は、動作主がイベントの内部に存在し、外的な働きかけを受けるわけではない。中国語では、外的な働きかけがないと受身文が成立しにくいという制限がある。③生産動詞の場合は、中国語受身文の主語になるものは、通常すでに存在しているものでなければならないという制限がある。つまり、中国語の受身文は、通常、すでに存在しているものは外的な働きかけを受け、結果が生じることでなければならないという制限がある。一方、日本語では、このような制限がなく、受身文が比較的成立しやすい。

心理動詞については、日本語では他動性が高い心理動詞が成立しやすいが、他動性のない心理動詞は受身文が成立しにくい。一方、中国語では他動性が高い、かつ動作性の心理動詞だけ成立しやすい傾向がある。心理動詞の場合も、日本語は中国語より受身文が成立しやすいと言える。

4. まとめ

本稿では、日本語との対照を通して、成立しやすいものと成立しにくいものをそれぞれ考察し、中国語受身文の成立条件を検討した。

中国語で受身文が成立するのは、以下のような場合である。結果性の強い動詞の場合、動詞は裸で受身文が成立する。結果性が明確でない場合、「動詞＋結果補語」で受身文を成立させる。また、量的限定などの手段でイベントを具体化することにより受身文を成立させる。結果と具体化はリアリティにつながるものと考えられる。

中国語受身文が成立しにくいのは、以下のような場合が考えられる。結果性を持たないもの、外的な働きかけを持たないもの、主語がすでに存在しているものではない場合、状態性心理動詞である。

つまり、中国語の受身文の成立条件は、すでに存在しているものが外的な働きかけを受けて生じた結果を、リアルに描写することであると言えよう。

注

1. 下線は本稿の筆者（楊）が付け加えたものである。
2. 本稿は京都外国語大学に提出する博士論文「日本語と中国語の受身文の対照研究」の一部である。
3. 図は寺村（1982：p. 247）から引用したものであり、「図 1-1」のような番号は論述の便宜上、筆者（楊）が付け加えたものである。
4. 筆者自身が表にまとめたものである。
5. 研究者によって、「受身文」、或いは「受動文」という用語を用いる。本稿では「受身文」という用語を使用する。
6. 例えば、“杯子打破了”（コップが割られた/コップが割れた）のように、形式的に“被”などのマーカーを持たないが、受身の意味を有する「意味上の受身文」は、受身文と言えるのかどうか。また、“他受到奖励”（彼は奨励を受けた）のような動詞“受”（受ける）で受身の意味を表す文は、受身文と言えるのかどうかは議論されている。紙幅の関係で、本稿ではこれらを考察対象とせず、典型的な“被”における受身文を考察対象とする。
7. 研究者により、「様態補語」か「程度補語」とも言われている。本稿では、「様態補語」という用語を用いる。
8. 本稿で取り挙げた中国語と日本語の例文の多くは、(日)、(CCL) などから引用したものであり、「用例出典」をご参照されたい。また、引用していないものに関しては自作例である。なお、翻訳はすべて筆者により付け加えたものである。
9. 野田（1991b）では、「殺す」と「死ぬ」は形態的に共通する部分がないが、意味的・構文的にヴォイスの対立を表すため、「語彙的なヴォイス」だと位置づけしている。
10. 宮島（1989）では、中国語の“杀了没杀死”（殺したが死ななかった）が成立することで、中国語の動詞は結果を表さないとしている。しかし、王（2003）では、この文についてアンケート調査して、文として成立しないという結果を得た。このことから、中国語の“杀”（殺す）は結果含意動詞であることが分かる。
11. 『日中辞典 第2版』（小学館）では“淹没”を語彙として取り扱っている。
12. 楊凱榮（1992）で指摘したように、“他打我”（彼は私をなぐる）という能動文は“了”を付けなくても成立し、過去のことを表せる。ただし、“我打他”（私は彼をなぐる）と“我看书”（私は本を読む）といった文は未来のことしか表せないことから、“了”を付けずに過去のことを表すのに、人称と動詞に制限が働くものと言える。いずれにせよ、中国語の受身文において、“了”などのマーカーが必要とすることに変わりがない。
13. 木村 1992 では「影響」という用語を用いているが、「何か動作・行為の結果として被る影響」という記述から見られるように、これまでの「結果」の用語とは大きな相違はないように思われる)
14. 日本語文法では、「条件複文」という用語を用いる。
15. 大河内（1997）は、連動式の第一述部、“把”構文は「素表現」と相容しないと示唆している。
16. 処置文である“把”構文や意味上の受身文においては、結果を表す様態補語が顕現できる。

“我们把会开得很成功。”（私たちは会議を成功に開いた）は前者であり、“会开得很成功。”（会議は成功に開いた）は後者である。

17. 『新明解国語辞典 第六版』では、「行われる」を自動詞としている。
18. “爱”（愛する）は制限された場面で使われることがある。例えば、“人的内心深处都有被重视、被肯定、被爱、被尊敬的渴望，”（CCL）（人の心の奥に重視されたい、肯定されたい、愛されたい、尊敬されたい願望がある。）という並列の場合。また、“按理，一个人被人爱着是一件非常美好的事，应该好好珍惜。”（CCL）（道理で、人は誰かに愛されているのは素敵なことで、大切にすべきだ。）という書き言葉の場合がそれである。しかしながら、“爱”（愛する）は通常、受身文が成立しにくいのは事実である。

用例出典

- （現）：「現代日本語書き言葉均衡コーパス」国立国語研究所
- （日）：小泉保ほか（編）（1989）『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- （CCL）：「北京大学汉语语言学研究中心（CCL）数据库 现代汉语」によるものである。当「数据库」（コーパス）により例文が現代の新聞記事、雑誌や文学作品から収集したものである。
- （拿）：海岩（2005）『拿什么拯救你我的爱人』作家出版社

参考文献

- 庵功雄（2008）「漢語サ変動詞の自他に関する一考察」『一橋大学留学生センター紀要』11：pp. 47-63、一橋大学留学生センター
- 市川保子（1997）『日本語誤用例文小辞典』イセブ
- 大河内康憲（1997）『中国語の諸相』白帝社
- 大河内康憲（1982）「中国語の受身」森岡健二[ほか]編『講座日本語学』10：319-332、明治書院
- 王占華（2003）「動詞における結果含意の日中比較」『日中言語対照研究論集』第5号：23-38、日中言語対照研究会
- 郭春貴（2001）『誤用から学ぶ中国語—基礎から応用まで』白帝社
- 木村英樹（1992）「BEI 受身文の意味と構造」『中国語』第389号：10-15、中国語友の会
- 木村英樹（2006）「「持続」・「完了」の視点を超えて—北京官話における「実存相」の提案—」『日本語文法』11号：45-61、日本語文法学会

- 玉村文郎編（1998）『新しい日本語研究を学ぶ人のために』世界思想社
- 下地早智子（1999）「被害受身の日中比較」『中国語学』246：107-116、日本中国語学会
- 下地早智子（2000）「日本語と中国語の受身表現について—機能主義的分析—」『人文学報』311：75-91、東京都立大学
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 豊嶋裕子（1988）「“被”字句の成立条件にかんして」『中国語学』235：99-108、日本中国語学会
- 中川正之（2005）『漢語から見える世界と世間』岩波書店
- 中川正之・定延利之（2006）『言語に現れる「世間」と「世界」』くろしお出版
- 中島悦子（2007）『日中対照研究 ヴォイス—自・他の対応・受身・使役・可能・自発』おうふう
- 野田尚史（1991a）『はじめての人の日本語文法』くろしお出版
- 野田尚史（1991b）「文法的なヴォイスと語彙的なヴォイスの関係」『日本語のヴォイスと他動性』211-232、くろしお出版
- 橋本進吉（1969）『助詞・助動詞の研究』岩波書店
- 早津恵美子（1990）「有対他動詞の受身表現について—無対他動詞の受身表現との比較を中心—」『日本語学』9-5：67-83、明治書院
- 早津恵美子（1995）「有対他動詞と無対他動詞の違いについて—意味的な特徴を中心—」『動詞の自他』須賀一好・早津恵美子編、179-197、ひつじ書房
- 馮富栄（1999）『日本語学習における母語の影響—中国人を対象として—』風間書房
- 益岡隆志（1987）『命題の文法』くろしお出版
- 三上章（1953）『現代語法序説 シンタクスの試み』刀江書院
- 宮島達夫（1985）「ドアをあけたが、あかなかった—動詞の意味における〈結果性〉—」『計量国語学』16巻8号：335-353、計量国語学会
- 宮島達夫（1989）「動詞の意味範囲の日中比較」『ことばの科学2』179-198、むぎ書房
- 森田良行（2005）『外国人の誤用から分かる日本語の問題』明治書院
- 楊凱栄（1992）「文法の対照的研究—中国語と日本語」『日本語と日本語教育』第五巻：312-340、明治書院
- 楊彩虹（2009）「中国語における『V+結果補語』受身文の成立条件について—“V倒”を中心—」『言語と文化』第3号：17-25、京都外国語大学
- 李临定（1990）「动词分类研究说略」『中国语文』总第217期：248-257
- 李珊（1993）『现代汉语被字句研究』北京大学出版社
- 杉村博文（2003）「从日语的角度看汉语被动句的特点」『语言文字应用』第2期：64-75
- Lauri Karttunen（1971）“Implicative verbs”, *Language* 47:340-358